

プロゴルファーの北村晃一プロ(32)は、現役選手でただ一人の中央大学出身者だ。今季から本格参戦し、5月の関西オープンで自己ベストの4位に入るなど躍進中である。中大法学部在籍時は、父親と同じく弁護士を目指していた。

父・北村晴男弁護士は日本テレビの人気番組『行列のできる法律相談所』の名解答でよく知られている。晃一選手のゴルフ界入りには、父の存在が大きかった。

「小学校6年か中学1年でしたか。家族で旅行へ行き、父に誘われてゴルフ場へ。レンタルのクラブで(スコア)90ぐらいで回りました。父は私にゴルフのセンスがあると思ったのでしょうか」

「100切り」に苦労しているアマチュアゴルファーが多いなか、初ラウンド90のスコアは特筆すべき事件ともいえる。父からは高校入学時に、大学入学時にも「ゴルフをすれば」と勧められた。

晃一選手は野球少年だった。ゴ

ルフより野球が好きで、神奈川県**の強豪・桐光学園高**時代は堅守の内野手として存在感を示した。

2001年春と2002年夏に甲子園大会出場。春夏ともに学園初の慶事の一役を担った。

甲子園でのプレーは2002年8月15日に行われた2回戦・桜美林(西東京)戦。二塁手で途中出場。守りを固め、エース清原投手の2試合連続完封を支えた。

関西オープン4位

中大1年次は、弁護士になる、と勉強に励んだ。大学受験は他大学を含めて法学部1本に絞っていた。ゴルフの入りこむ余地はなかった。

転機は4年次の秋頃。軟式野球のサークルを退き、没頭していたものから離れた時期である。中学から高校と野球に打ち込み、野球を終えると受験勉強に傾注した。「やり始めると熱中するタイプでした」

熱が冷めかけた、そのとき、ゴルフが頭をもたげてきた。折に触れて父に勧められ、3年次にはプロゴルファーから「晃ちゃん、プロゴルファーになったら」と才能を見出された。そのプロは父のレッスンを指導、晃一さんも見てもらっていた。

法曹入りは2年次で断念していた。同級生の勉強に対する「熱量にびっくりして、こちらは何となく

プロゴルファー 現役ただ一人



北村晃一氏 の中大出身者

関西オープン第1日、2アンダーで2位の北村選手
(写真提供=共同通信)



だったから」

就職活動では、「性格的にサラリーマンには向かないし、起業しようかとも考えていましたね」

自分と向き合った末、プロゴルファーになると決意。それから毎日、ボールを打った。

「始めたのが遅いから、死ぬ気でやらないと」

練習は午前8時から午後10時まで。一人だけの練習だ。170㌢、72㌔の体に自らムチをうつ。大学卒業後はゴルフ場のコースを借りて、朝から晩まで上達を目指した。

2年後の2009年12月、難関のプロテストに初受検で合格した。ゴルフ歴2年での合格は異例のスピードといえる。才能という土壌にたゆまぬ努力が水となり、光となり、開花したのだろう。

2009年の前後5年間の合格者を見ると、「ゴルフ歴2年」という

のは最少キャリアだ。同期合格者のなかにはゴルフ歴10年超、20年超の人たちが、プロ入りの狭き門をくぐり抜けようとしていた。

ツアー初出場は2011年4月の中日クラウンズ。大舞台でいきなり予選通過を果たす堂々のデビューだ。2014年の九州オープンでは、首位に立つ実力者の小田孔明、宮里優作両プロを相手に逆転優勝を遂げた。

ゴルフをもっとメジャーにしたい

今シーズンは初めての本格参戦。4位に食い込んだ今年5月の関西オープンは日本最古のオープン競技。目の肥えたギャラリーに自らの存在を印象付けた。この試合は、父が応援に駆け付けていた。

得意なクラブはパター。活躍が期待される選手の一人である。

中大出身のトーナメントプレイヤーは北村晃一プロただ一人。試合に中大は何ら関係ないが、財界人やスポンサーらが集まる大会前のイベント「アマプロトーナメント」では、中大出身と聞いてきた各界のOBらが集まり、友好の輪が

広がる。

北村プロには、大きな目標がある。

「ゴルフをもっとメジャーにしたい」

大好きなゴルフ。豊かな人生を予見してくれそうなゴルフ。

ゴルフ界をさらにメジャーにしたい気持ちは、ゴルフへの恩返しなのだろう。



関西オープン最終日、18番でパットを放つ
(写真提供=共同通信)



学食の思い出

北村氏が通った多摩キャンパス、学生食堂「ヒルトップ」は、サークル仲間の憩いの場所だったという。

「授業がないときは、ほとんど学食にいましたね。ラーメンにチャーハンのセットが好きでした。ハンバーガーもよく食べていた。アルバイトの給料が入ると4階の四季へ。学食はメニューが豊富だったから、飽きなかったです」。学食の話題は卒業後何年経っても、きのうのこのことである。

仲間とワイワイガヤガヤ

サークル仲間は「先輩・後輩を合わせると200人くらい、いたと思います」と北村氏。1学年に約30～40人。主目的の軟式野球のほか企画イベントも盛りだくさんで、学生注目のサークルだった。

白門祭では模擬飲食店を出すのが恒例だ。大学周辺で1人暮らしの友人・仲間の部屋でそれぞれが仕込みをする。ワイワイガヤガヤ…。アツという間に時間が過ぎていく。「楽しかったですよ」

自宅通学ながら、時には複数の友人宅に泊まり込み、なかには着替えを常備していた部屋もある。「青春を謳歌(おうか)しましたね」と笑みがこぼれた。